

# 太陽の時間—— この町を守るために 会社はある。



## ○見たことのない記憶

長い摺鉢山のトンネルを抜けるとすぐにその光景はあらわれる。ハンドルを握る修坊の胸が痛んだ。もちろんはじめて見つけたものではない。通勤のために毎日この道を車で往來するたび、いやでも眼に飛び込んでくる。しかし、シュウボウの胸の痛みはすこしも薄れる

ことはない。

去年の台風21号が山肌に残した爪あとである。土砂崩れによって、植林されたヒノキの大木がなぎ倒されていた。せつかく手をかけ、時間をかけて、ここまでにした木なのに。しかも、これを植えた人々は自身のためにそれを行なったのではない。次世代、次々世代のために植えた木だった。

「もうすこしで切り出すところだ。たろうに……」車窓越しに眺めた景色から受けた痛みは、やがてシュウボウの内にある痛みへと直結してゆく。それは、シュウボウが眼にしたことのない、けれど実際に自分がその場にいたかのような、すでに記憶の一部となっている光景だった。

シュウボウの祖父・武和氏が村長をつとめる二川村が水底に沈むことがきまった。ダム建設である。武和氏はダム反対派だったが、すでに決定した事業だった。あるいは現代なら、さらに話し合いの場が持たれるべき経緯があったかもしれないし、テレビなどのメディアの介入もあっただろう。そうなれば、展開もかわったかもしれない。しかし、そういう時代ではなかった。武和氏一家は自宅に居座り、強硬姿勢を見せたが、10台余りのトラックがやって来て、強制退去させられた。広大な旧家が眼のまえで取り壊されてゆく。屋根瓦が投げ捨てられ、壁が打ち崩される。丹精した田も水の底に沈んだ。

「あと1週間で稲刈りだったのに……」祖母が声を上げて泣いた。湯原ダムが完成したのは昭和30年のことだ。昭和33年生まれのシュウボウがそうした場面を目撃しているはずはない。それでも、祖父母や両親が繰り返し語るのを聞いて

いるうちに、いつしか自らも立ち会ったかのような疑似体験をしていったのだ。

シュウボウ——オーティス株式会社代表取締役・佐山修一が、生まれ育った故郷によせる思いは深い。それは、水底に消えた地への愛惜が重なるためかもしれない。

## ○立身出世とは

シュウボウには、長男よりも弟の方が偉いのだという考えが根強くある。

かつての二川村は町村合併し湯原町となり、父親の将和氏は町会議員をつとめていた。祖父の地場を継いだのだ。

「寵突の灰まで長男のもの」という言葉がある。長男は親の持ちものを引き継ぐことができる。しかし、長男でなければ、なにもないところから自力で立ち上げなければならぬ。それこそが、立身出世を具現することのように思えた。将和氏の弟・大三郎氏も、岡山市でガス販売・配管工事の会社を起業し、成功させていた。シュウボウは、起業家の叔父に男の口マンを感じた。

しかし、そんな憧れとは別に、自らも長男であるシュウボウは、佐山のぼんぼん“として、ぬくぬくと育っていた。

それでも、大阪の桃山学院大学に進学すると状況は一変した。都

オーティス 株式会社／代表取締役

# 佐山 修一氏

さやま しゅういち



「もっと良いモノをつくりたい」そんなスタッフが集まっているのはそれぞれの「モノづくりが好き」という気持ちを大切にしているから

会に出てみると、自分など少しも「ぼんぼん」ではなかった。上には上の「ぼんぼん」がいくらでもいる。だいたい自分は生活費の足しにアルバイトに励まなければならなかった。中学高校と打ち込んだバスケットボールは大学でもつづけた。アルバイトのために大学の4年間通ったのは、そのバスケット部の先輩の実家が経営するソフトプレス工場だった。たいへんだけれど、からだをつかうのは性に合っている。足踏み式裁断機を扱うのも面白かったし、けつこうな収入にもなった。

### ○流転

就職活動はしなかった。大学卒業後は服飾会社のアルバイトとして梅田の阪急百貨店に向。そこでジーンズを売っていた。

正社員としての就職を強く望ま

若年層の社員が増えた現在、いい橋渡し役をつとめてくれている。彼女は、若い社員を自分の息子のようになびき、やさしく扱っている。

取引先が海外発注に切り替えたことで立ち行かなくなった他の工場から技術者や管理能力のある人材を獲得できたことはオーティスの大いなる発展につながった。

「モノづくりをされていて、できないことはありません。しかし、できません」という返答はしません。いまはできないことも、1年後にはできるようになっている。それは優秀な技術者がいるからです」

シウボウは多忙ななかにも時間をつくり、地元中学でバスケットボールのコーチをつづけている。これはもう20年になる。消防団の訓練にも手を抜かない。湯原で火事が起こったら、なにをおいても現場に駆けつけるつもりだ。「自分が湯原のためにできること、それは経済(会社経営)、自治(消防団)、教育(バスケットコーチです)」とシウボウは言う。



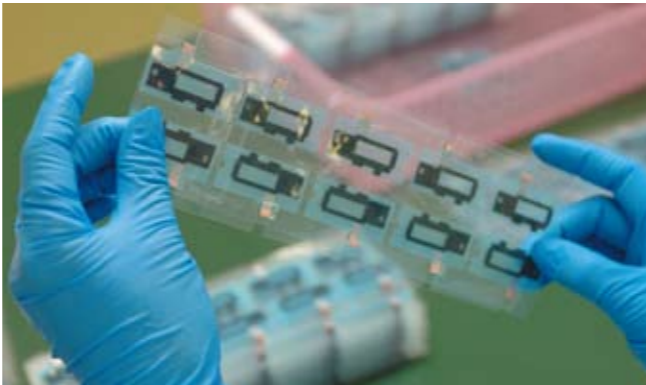
れで安泰である。ところが、毎日、職場へと向かうシウボウの表情は冴えなかった。なにかがちがう。一生懸命働けば働くほど自分は浮いてしまう。頑張り過ぎないことをよしとする風潮がそこには蔓延していた。1年してシウボウはその職場を去る。自分は我がままなのかもしれないと思った。

### ○故郷へ――

県の事業団を辞めたシウボウは25歳になっていた。もはや自分のような人間は、誰かにつかわれるのではなく、自分でなにかをするしかないと思いはじめていた。そこには、なにもないところから起業した叔父の姿への憧憬もあった。

シウボウは故郷の湯原で喫茶店を開くことを考えた。湯原で起業することは、自分を育ててくれた町への恩返しである。そのための見習い仕事としてドライブインのコックになった。ハンバーグを焼き、スタミナ定食をこしらえる。大半の時間はキャベツをせん切りに刻んでいたかもしれない。1年の修行の後、湯原のホテルから声がかかった。「シウボウ、いいかげんに町に帰ってこいよ」と言うのだ。

愛してやまない故郷――そこには消防団や商工会青年部の活動があり、懐かしい仲間たちがいる。シウ



7月に新本社工場が始動した。広いクリーンルーム(クラス8)では製品の用途に合わせたラミネートや検品作業などが行われている

ウボウは、湯原のホテルでも朝は

板前、昼は事務員、夜はバーテンとして働いた。そうやって得た金で、国鉄の払い下げの貨車を4両手に入れた。それを連結し、喫茶店の店舗にしようと考えたのだ。

いよいよ準備は整ったかに見える。しかし……店舗の建設を依頼する予定だった会社が倒産した。家族もシウボウが喫茶店を開業するのは反対だと言う。

それなら、とシウボウは考えた。これまで自分が携わったこと

で、いちばん実入りがよかった仕事はなんだったろう、と。

### ○太陽の時間

昭和60年、シウボウがオーティスの前身である佐山製作所を開業したのは、例の喫茶店の店舗を依頼するはずだった建設会社の跡地だった。

シウボウは親友の小野拓志(現・オーティス専務)に、「いっしょにやろう」と声をかけた。小野は、シウボウがバスケットボールに励んでいた中学時代、卓球部のキャプテンだった。野球部のオールラウンダー、ドブレイヤー池田享史(同常務)は、傍からシウボウの工場展開を眺めていた。そして、「おまえの運に

賭けた」と言って事業に参加した。

大学時代のアルバイト先だった工場から下請け仕事を得て、音響用ゴムやフェルト、各種粘着製品の打ち抜き加工を開始した佐山製作所は、2年後には会社組織に改組。その7年後には海外に初の工場進出を果たしていた。

一見、無分別であるかのように見えたシウボウの歩みだったが、すべてはオーティスに至る道のりだった。

「百貨店で接客業を学んだし、ホテルのバーテン時代には走りだったカラオケに早くから慣れ親しんでいたのを歌をうたうのも臆することはありませんでした。タンバリンをたたくのもうまいですよ。これが営業で役に立ちました。コック時代に身につけたキャベツのせん切りの腕まえばは……まあ、これはあまり関係ないか」

ただし、人集めには苦労した。地元の若者はみな外に出ていってしま。そこで、働き手となったのは主婦たちだった。彼女らは、きれいな好きで、きっちりしていて、歯に衣着せぬものに言った。工場は、まが、彼女らが働くことで職場はいつも掃除がゆきとどいていた。ただ、子どもの運動会や農繁期に休まれるのが痛手だった。しかし、そうした彼女らが中心にいて、

いまはできないことも、1年後にはできるようになっている。それは優秀な技術者がいるからだ。

## COMPANY PRO-file

オーティス 株式会社  
所在地: 〒719-3225 岡山県真庭市中原 202-13  
TEL: 0867-42-3690 FAX: 0867-42-3694  
担当者: 代表取締役 佐山修一  
事業内容: 各種樹脂フィルム・両面テープ・ゴムシート・金属箔などのラミネート、ロータリー刃・トムソン刃・腐蝕刃・金型を使用したプレス抜き加工  
エミダス会社・工場詳細情報:  
http://www.nc-net.or.jp/emidas/gaiyou.php?69715  
※「エミダス工場検索」のキーワード検索「オーティス」で検索できます。